

# Kūṭadanta-sutta に於ける祭式

引 田 弘 道

Dīgha-Nikāya 第五所収の kūṭadanta-sutta は、バラモン kūṭadanta が盛大な祭式 (mahā-yañña) を何百頭もの牛や山羊等を祭柱に縛り、これらを屠って行なおうとしたがその祭式の正しい方法を知らず、仏陀の許へ赴いて教を請うたところ、遠い過去世の Mahāvijita 王の物語を例にとりて逆に祭式よりもずっと果報のあるものは何かということ順次に教えられ、終に仏教に帰依するようになったことをその内容の骨子とするものである。本稿では対応する漢訳『究羅檀頭經』(大正 1, 96~101 頁) を参照しながら、特にこの經に説かれている祭式の内容について考察を加え、さらにこのパーリ文・漢訳の、祭式を中心とした編集の意図を明らかにしてみたい。

まずこの經典に散見される mahā-yañña とは一体何であるのかということが問題になる。漢訳では「大祀」とあり、PTS. の辞書では the great sacrifice と英訳されている。一方、この mahā-yañña (Skt. mahā-yajña) はヒンドゥー教では「五大祭式」(pañca-yajña) を示すことも広く知られている。それではこの經は全くこの五大祭式のことを念頭におくことなく編集されているのであろうか。この疑問を解くためにまずマヌ法典に説かれているこの五大祭式の内容を調べてみる。

adhyāpanaṃ brahma-yajñaṃ pitṛ-yajñas tu tarpaṇam,  
homo daivo balir bhauto nṛyajño 'tithi-pūjanam. (Ms. III-70)

(ヴェーダ) の教授はブラフマンへの祭式、タルパナは祖靈への祭式、

護摩は神への祭式、バリは鬼靈への祭式、客への饗応は人間への祭式である。

いまこの偈を指標として本經を考察してみると、この偈それ自体は存在しないものの、この偈を構成する adhyāpana, tarpaṇa, homa, bai, atithipūjana に関連する語句が発見されるのである。即ち、

- (1) *ajjhāyako manta-dharo tiṇṇaṃ vedānaṃ pāragū*…(p. 138)
- (2) *alam eva saddhena kulaputtena dassanāya upasaṃkamitum*…(p. 133)
- (3) *medhāvi paṭhamo vā dutiyo vā sujaṃ paggaṇhatānam*. (p. 138)
- (4) *rājā evaṃ sakaṇṭhake janapade sa-upapīḷe balim uddhareyya*,…(p. 135)
- (5) *atithi kho pan'amhehi sakkātabbā garukātabbā*…(p. 133)

これらのうち(2)の saddha は「祖靈祭」(Skt. śrāddha)ではなく「信心ある」の意味で、また(4)の bali は「バリ供養」ではなく「税金」の意味で用いられている。また(3)の sujā (Skt. sruca) はホームの時に用いる祭具の杓子である。このようにこの経の語句、(1) ajjhāyaka, (2) saddha, (3) sujā, (4) bali, (5) atithi はそれぞれ五大祭式の adhyāpana, tarpaṇa, homa, bali, atithi と関連していることがわかるのである。一方漢訳では(1)と(5)の対応語しかなく、パーリ文に比べてこの「五大祭式」を念頭においた編集はなされていないように思われる。

次にこの経の祭式を考察をする上で、パーリ文にはなく漢訳にのみ現われる箇所を注目すべきであろう。この漢訳の箇所が無雑作に挿入されたものであるのか、あるいはこのパーリ文と何らかの関連性をもっているのかをまず考察してみることが必要に思われる。いまこの箇所を示すと、

(A) 王聞語已即於城東起新堂舍。王入新舍被鹿皮衣。以香酥油塗摩其身。又以鹿角載之頭上。牛屎塗地坐臥其上。及第一夫人婆羅門大臣。選一黃犍牛。一乳王食。一乳夫人食。一乳大臣食。一乳供養火衆。餘与犢子 (99頁上)

(B) 爾時刹利王水澆頭種。以十五日月滿時出彼新舍。於舍前露地然大火蘊。手執油瓶注於火上。唱言与与。(100頁上)

(C) 彼王大祭祀時、不殺牛羊及諸衆生。唯用酥乳麻油蜜黑蜜石蜜以為祭祀。(100頁中)

以上の一連の祭式のうち最後の(C)の箇所にもみ対応するパーリ文が認められ、しかも漢訳よりもより詳しく説かれている。即ち、

(C') tasmim kho brāhmaṇo yaññe n'eva gāvo haññimṣu na ajeḷakā haññimṣu na kukkuṭa-sūkarā haññimṣu, na vividhā pāṇā saṃghātaṃ āpajjimṣu, na rukkā chijjimṣu yūpatthāya, na dabbā lūyimṣu barihisatthāya, ye pi 'ssa ahesuṃ dāsā ti vā pessā ti vā kammakarā ti vā te pi na daṇḍa-tajjitā na bhaya-tajjitā, na assu-mukhā rudamānā parikammāni akaṃsu (p. 141)

(A) と (B) はパーリ文に対応がなく、漢訳 (C) とパーリ文 (C') とは一応の対応をみるものの (C') のほうがはるかに詳細に説かれているというこみいった状態を解決するための手がかりとして、Majjhima-Nikāya 第五十一所収の Kandaraka-sutta 中、自らを苦しめ他人を苦しめる行の例としてあげられる箇所<sup>1)</sup> は注目し値しよう。即ち (A) と (C') とを合わせた文がまとまって現われているのである。

(D<sup>1)</sup> Idha bhikkhave ekacco puggalo rājā vā hoti khattiyo muddhāvasitto brāhmaṇo vā mahāsālo. so puratthimena nagarassa navaṃ santhāgāraṃ kārāpetvā kesa-mas-suṃ ohāretvā kharājinaṃ nivāsetvā sappitelena kāyaṃ abbaññitvā maga-visāṇena

piṭṭhim kaṇḍvumāno santhāgāraṃ pavisati saddhiṃ mahesiyā brāhmaṇena ca purohitena. so tatthe anantara-hitāya bhūmiyā haritupattāya seyyaṃ kappeti. Ekissā gāvīyā sarūpa-vacchāya yaṃ ekasmiṃ thane khīraṃ hoti tena rājā yāpeti, yaṃ dutiyasmiṃ thane khīraṃ hoti mahesī yāpeti, yaṃ tatiyasmiṃ thane khīraṃ hoti tena brāhmaṇo purohito yāpeti, yaṃ catutthasmiṃ thane khīraṃ hoti tena aggīṃ juhanti, avasesena vacchako yāpeti.

(D<sup>2</sup>) So evam āha : Ettakā usabhā haññantu yaññatthāya, ettakā vaccharā haññantu yaññatthāya, ettikā vacchatariyo haññantu yaññatthāya, ettakā ajā haññantu yaññatthāya, ettakā urabbhā haññantu yaññatthāya, ettakā rukkā chijjantu yūpatthāya, ettakā dabbhā lūyantu barihisatthāya ti. Ye pi'ssa te honti dāsā ti vā peṣā ti vā kammakarā ti vā te pi daṇḍa-tajjitā bhaya-tajjitā assu-mukhā rudamānā parikammaṇi karonti (MN. vol. I, pp. 343-44)

この文が基本となってパーリ文の (C') と漢訳 (A) と (C) に分散して現われていることは一目瞭然である。即ち、

一文  $\begin{cases} (D^1) \rightarrow (A) \\ \text{否定辞を挿入} \\ (D^2) \rightarrow (C) \text{ と } (C') \end{cases}$  但し (C) はかなり省略されている。

この経は祭式の無効性を強調する目的で編集されたものである故、MN. 中の Kandaraka-sutta のこの一文を採用しながらもそれを否定する形式に変形させたと思われるのである。しかもパーリ文のほうは否定の形を特に重視して (C') として説き、漢訳のほうは祭式の描写を重視して (A) と (C) の形で説いたのであろう。ここにも漢訳とパーリ文との編集の意図の違いがわかるのである。

一方、(B) の位置づけは残念ながらはっきりとしない。MN. の当該箇所とも何らの関連性もなく他の經典を調べてみる必要があるように思われる。ただ漢訳『典尊經』(大正 1, 32頁中) 及び異訳の『大堅固婆羅門緣起經』(大正 1, 211頁上) に、(B) と類似した表現が認められる<sup>2)</sup>。

時大典尊於彼城東，造閑静室。……時大典尊以十五日月滿時，出其静室於露地坐。(『典尊經』)

当苾芻布薩白月十五日。即於彼處。依婆羅門法。以新瞿摩夷。先塗其地。然作四方火壇。其壇中心復作火炉。……施作火事。(『大堅固婆羅門緣起經』)

この経の十五日、満月の布薩の時に小屋より出て祭火壇を作りホーマを行なうという内容は (B) と酷似している。前後の文脈は一致しないものの、この箇所だけをとり上げれば、おそらく『典尊經』の中のこの部分と『究羅檀頭經』の (B) は同種の源泉より借用されたのではないかという推測も可能になるのである。

以上の如く漢訳 (A) (B) (C) 及びパーリ文 (C') の関連についての考察をなしたが、それではこの原形とされる MN. 所収の (D<sup>1</sup>), (D<sup>2</sup>) は如何なる祭式なのであろうかという疑問が生じる。この場合漢訳 (B) は未だ明らかではなく、(D<sup>1</sup>), (D<sup>2</sup>) との関連もない故、本稿の考察の対象としないことにする。さらに (D<sup>2</sup>) は (D<sup>1</sup>) と比べて祭式の一般的記述の感が強く、この祭式の所属を決定するてがかりとはならないように思われる。それ故 (D<sup>1</sup>) のみを問題とし、いまこの箇所のと訳を試みると、

比丘たちよ、ここに灌頂をうけたクシャトリヤの王あるいは大家のバラモンがいる。彼は城の東方に新しい堂を造らせて、鬚髪を剃らせ粗い獣皮の衣服を着、酥油を身体に塗り、皮の角で背中をかきながら王妃、バラモンの宮廷祭官とともにその堂に入る。彼はその牛糞の塗かれたばかりの、むき出しの地の上に臥す。同じ形の子牛のいる一頭の牝牛の第一の乳房にある乳をもって王は生命を保持し、その第二の乳房にある乳をもって王妃は生命を保持し、その第三の乳房にある乳をもってバラモンの宮廷祭官は生命を保持し、その第四の乳房にある乳をもって祭火に献供し、その残をもって子牛は生命を保持する。

クシャトリヤの王が干与できる祭式を調べてみると、Sutta-nipāṭha 303 に *assamedha*, *purisamedha*, *sammāpāsa*, *vācāpeyya*, *niraggaḷa* の五種の祭式が列挙されている。

そのうち *vācāpeyya* (Skt. *vajapeya*) に注目する必要があるだろう。というのも Śatapatha Brāhmaṇa IX. 3. 4. 8. に王 (*rājan*) は *rājasūya* を行なって後、*vājapeya* を行なって大王 (*samrāt*) になると述べられているからである<sup>3)</sup>。即ち、

実に彼はまず *rājasūya* を行って次に *vājapeya* を行う。実に *rājasūya* を行って王になり、*vājapeya* を行って大王 (*samrāt*) になるのである。まず王国が (生じ) 次に大王の領土が (生じる)。それ故 *vājapeya* を行って後に *rājasūya* を行うべきではない。大王である者が王になるというような身分の降格が生じるから。

以上の記述は本経の Mahāvijita 王が行なった祭式の目的と大変よく合致する。即ち既に王の灌頂式を終了した (*muddhāvasitta*) 彼はさらに大王 (*samrāt*) になろうとしてこの祭式を行なったと思われるのである。

それ故、この *vājapeya*<sup>4)</sup> の祭式を調べると、これはソーマ祭の一種とされ、*dikṣā*・*upasad*・ソーマの压榨より構成される。このうちソーマ祭の前に祭祀者と彼の妻によって行なわれる *dikṣā* が先述の (A)・(D<sup>1</sup>) に酷似しているように思われる。そこで ŚB. より (A), (D<sup>1</sup>) に関連するところを抜粋すると、

*tac chālāṃ vā vimitaṃ vā prācīna-vaṃśaṃ minvanti.* (III-1-1-6)

sa keśa-śmaśru vapati (III-1-2-9)

tasminn etāṃ tvacam adadhur vāsa eva (III-1-2-16)

athāgreṇa śālāṃ tiṣṭhann abhyañkte (III-1-3-7)

athainam śālāṃ prapādayati (III-1-3-28)

dakṣiṇenāhavanīyaṃ prācīna-grīve kṛṣṇājine upastrṇāti (III-2-1-1)

sa vai jaghanāndha ivāgra āsīta (III-2-1-9)

dikṣitaḥ kṛṣṇa-viṣānayaiva kaṇḍūyeta (III-2-1-31)

tad eṣa eva vratayati nāgnau juhoti. (III-2-2-10)

このうちまず堂舎について、(A)、(D<sup>1</sup>)ともに城の東に小屋 (santhāgara) を建てることあるが、ŚB. では小屋 (śalā) または梁が西から東に伸びた小屋 (vimita) を建てることある。また衣服は (A) で鹿皮、(D<sup>1</sup>) で kharājina、ŚB. で tvac とある。小屋のうちでは、(A) (D<sup>1</sup>) とも牛糞を塗った地上に臥すとあるが、ŚB. では頭が東に向いた二枚の黒鹿の皮の上に坐るとある。鹿の角の使用法は (A) で頭上に戴せるとあり、(D<sup>1</sup>) で背中をかく、ŚB. でただかくとだけある。最後に小屋の内で王・王妃・バラモン宮廷祭官が牝牛のそれぞれの乳房の乳のみで生命を保つこと (A)・(D<sup>1</sup>) にあるが、ŚB. ではただ単に乳だけを飲むこと (vrata) を行うことのみである。このように細部についてはかなり相違点があるにもかかわらず、この (A) (D<sup>1</sup>) の祭式の内容は ŚB. に説く dikṣā とほぼ同じであろうと思われるのである。

以上のことよりこの経は Mahāvijita 王が vājapeya の祭式をして大王 (samrāt) になろうとしたことを物語っており、パーリ文のほうはその祭式の無効性を強調した形で、漢訳のほうは祭式、特に dikṣā の箇所を採り上げて編集されたと考えられる。

- 1) その他 Aṅguttara-Nikāya, vol. 2, pp. 207~208, Puggala-paññatti, p. 56, 『阿毘選磨集異門足論』卷九 (大正26, 406頁中)。
- 2) 『典尊経』はパーリ本に近く、『大堅固婆羅門縁起経』は梵本に近い内容をもつとされる。末木文美士『典尊経』(『月刊 アーガマ』59号)注(165)を参照。また本経の諸本を対照させたものとして、K. Hahlweg, Das Mahāgovinda-Sūtra. Eine vergleichende Analyse der indischen und chinesischen Versionen, München, 1954. がある。
- 3) この rājasūya と vājapeya を行う順については種々の見解がある。kane, History of Dharmaśāstra (Poona, 1974) vol. II, part II, p. 1214 参照。
- 4) ソーマ祭 (jyotiṣṭoma) には、agniṣṭoma, ukthya, atirātra, atyagniṣṭoma, ṣoḍaśin, vājapeya, aptoryāma の七種 (sapsthā) がある。
- 5) dikṣā についての内容及び研究文献の紹介については、A. B. Keith, The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads (H. O. S. vol. 31, Delhi, 1970) pp. 300~303 を参照。  
(愛知学院大学講師)